HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	公共的記憶に内在する格差とその克服に関する研究 : 戦後ドイツにおける２つの「警鐘碑論争」の場合[論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	千葉, 美千子
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 乙第7201号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91939
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Chiba_Michiko_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　　氏名：千葉　美千子

学位論文題名

公共的記憶に内在する格差とその克服に関する研究
―戦後ドイツにおける 2 つの「警鐘碑論争」の場合―

本論文の目的は、戦後ドイツにおける「警鐘碑論争（1989－2005）」と「もう一つの警鐘碑論争（2005－2012）」を主たる手掛かりとして、公共的な記憶に内在する格差の現状と原因、そしてその克服のプロセスを考察することにある。二つの「警鐘碑論争」は、ナチス・ドイツの犠牲者追悼のために建立されることになった「警鐘碑」を巡って 1980 年代後半から 2010 年代前半にかけドイツで行われた論争のことを指す。主たる争点は、警鐘碑の捧げられる対象である。具体的には最大の犠牲者となったユダヤ人に絞られるべきか、あるいはスィンティ・ロマをはじめとするその他の犠牲者にも広げるべきか、という点である。論争ではドイツ政府、行政機関、代表者、一般市民、知識人、メディア関係者、犠牲者であるユダヤ人、スィンティ・ロマの団体等によって様々な立場・視点から数多くの議論が繰り広げられた。戦争犯罪の実態、被害者への補償、民族の文化的・宗教的背景、戦後の政治的・国際的状況等、多くの問題が絡み合っていたが、本論が着目するのは犠牲者間に存在した記憶の格差の問題である。戦後ドイツにおいて、犠牲者の、また犠牲者への認識は、同様の迫害を受けたにもかかわらず、ユダヤ人とスィンティ・ロマでは明らかに異なっていた。本論文は、まず格差の実態を歴史的事実として明らかにし、格差が生まれ構造化されていった要因を探り、さらにはそれが「警鐘碑論争」を契機に社会的問題となることによって、一定の克服プロセスを辿ったことを明らかにする。結果として、理論的には「個別的記憶の複数化・特殊化」と「社会的認識の一般化・統一化」の対立軸が、「想起の多様性を志向する文化」と「了解志向のコミュニケーションという公共性」という組み合わせを通して一定程度克服され、「格差」という障壁を乗り越えるひとつの道筋が示される。

本論の構成は、次の通りである。序章では、格差の実態と歴史的経緯・事実、格差が生まれた理由、格差克服に向けた取組みを概観すると同時に、本論で解明すべき問いを具体的に設定する。続く第 1 章では、本研究のフレームとなる概念、すなわち「公共性」と「想起」を理論的に描き出すことが目的となる。

具体的には、アレント、齋藤純一、ハーバーマス、フレイザー等の議論を参照しつつ、了解志向的コミュニケーションとしての「公共性（公共的コミュニケーション）」、およびアスマン、安川晴基等の議論から、対話する記憶としての「想起」を抽出する。その際、「記憶の多元性」の扱いが問題となるが、第 2 章ではアスマンの理論を手掛かりに、①「機能的（顕在的）記憶」と「蓄積的（潜在的）記憶」の相互補完的関係、②「場所の記憶」が孕む個別性と一般性、③「学習記憶」と「経験記憶」の力学、これらから④記憶と想起には相互依存性と可変性があることを確認する。またこの考察から、「記憶と認識の格差」の克服には、記憶の多元性・可変性を社会的に受容（理解）可能なものとする「想起の契機」と「了解志向的な公共性（公共的コミュニケーション）」が鍵になることが導き出される。

以上の理論的な成果を背景にして、第 3 章から文献、メディア記録、証言等の資料を基にした歴史学的手法による具体的事例検証がおこなわれる。まず、ドイツ首相／大統領の記念演説やメディアに現れるドイツ（人）の意識変化が取り上げられ、行為者（加害者）としての記憶の抑圧と顕在化の力学が描かれる。続いて、「歴史家論争」をもとに、自国の国家犯罪を相対化しようとする歴史修正主義と、当事者という第 1 人称のパースペクティヴによる（個別的）記憶を継承しようとする意識の対比を、さらには「ヴァルザー＝ブービス論争」をもとに負の記憶の疲弊がもたらす記憶と想起の二面性を、すなわちメディアを通じて肯定的にも否定的にも表象されうる危うさを明らかにする。第 4 章では、前章の危惧を意識しつつ、ユダヤ人犠牲者とロマ犠牲者の間に「記憶と認識の落差」が生じた背景を考察する。具体的には、ユダヤ人とスィンティ・ロマの歴史的背景を比較し、格差が構造化されていった軌跡を描写すると同時に、メディアを介した両者の発信力と表現力の違いが主流社会に「認識の格差」を、また「犠牲者間のヒエラルヒー」をもたらしたという事実を明らかにする。これは、格差が自然発生的なものではなく、人為的に形成されたことを意味している。続く第 5 章では、「警鐘碑論争」に先立つ 4 つの事例研究により、格差の構造化が与えた影響、及びその克服に向けた萌芽的取組みをメディアと関連付けながら考察している。第一に米国のホロコースト記念博物館の開館時における追悼対象者を巡る議論、第二にポーランドのアウシュヴィッツ・ミュージアムでのロマの水彩画を巡る「記憶の所有権争い」、第三にドイツの戦後補償の取組み、第四に戦後の歴史教育の軌跡をめぐる考察の 4 つである。それぞれの事例で、想起と公共的コミュニケーションの組み合わせが格差克服に果たし得る可能性が併せて考察される。

第 6 章から「警鐘碑論争」の分析が行われる。同論争には、ユダヤ人犠牲者のみに捧げる国家的警鐘碑の可否、および追悼の対象者にしばりを設けることの是非という 2 つの争点があり、そこから議論は派生的に多面化していく。慰霊碑（Monument）、警鐘碑（Mahnmal）、記念碑（Denkmal）の名の選択、建立場所の真正性、デザインの含意すべきもの、再統一と政治性―「警鐘碑論争」は、様々な問いを鮮明にした。こうした背景を踏まえ、本章は、提唱期→衝突期→停滞期→和解期という流れで議論の展開を追い、あらゆる場面で課題解決に資す調整弁となったのは多様な「想起」の受容と了解志向的な「公共的コミュニケーション」の組み合わせであった事実を明らかにする。第 7 章では、「もうひとつの警鐘碑論争」を取り上げ、「殺害されたヨーロッパのスィンティとロマに捧げる警鐘碑」の完成までの道筋を描き出す。すなわち、「もうひとつの警鐘碑論争」が内包する問い→ベルリン市による土地提供の承諾→銘文を巡る不協和音→竣工に向けた調整という流れで落成までの軌跡を辿る。結果として、ここにおいても、格差の構造化は「想起と公共的コミュニケーション」の組み合わせにより一定程度克服可能なものであるが、メディアの下では再生産されやすい危うさを抱えていることも明らかになる。

終章では、本論を総括し、かつ補足的な考察・分析結果を提示する。主たるものは、①「警鐘碑論争」において、「想起」の理念（アスマン等）と「公共的なコミュニケーション」の理念（ハーバマス等）の組み合わせは、利害関係者の間に様々な質的な変化を引き起こしながら、了解志向的な合意形成へと向かわせ、政治的意思決定の場に少なからぬ影響を及ぼすことができたということ、②このようなプロセスを経ることで「多様性」と「統一性」、「個別化」と「一般化」の均衡が現れてきたということ、他方、③メディアの中立的監視は、議論の公平性を期すうえで不可欠であるが、表象次第では他の集団との間の格差が暗黙裡の内に助長されてしまう危険があるということ、以上の 3 点である。ここから「公共的記憶に内在する格差とその克服」のプロセスに関する考察を総括すると同時に、残されている課題を確認することで本論は締めくくられる。